

皮革産業の歴史年表といえ、情報量の多さと正確さで『大塚製靴百三十年 年表(草稿)』(2003年作成 渡辺陸・編)は、私にとって手放せぬ座右の書である。

その年表の28頁に、◎明治41年(1908)「…東京府下木下川に、東京皮革製造所が、上原富蔵、弾慎平らにより設立される。」とあるから、創業当初は、共同経営でスタートしたようである。

明治44年(1911)5月『皮革世界』の創業満三年広告(前号参照)には、所主・弾慎平とあり、工場所在地は、東京府南葛飾郡大木村下木下川とあって、会社の順調な発展ぶりが窺える。

大正元年(1912)の業界誌『皮革世界』の消息欄に、「…東京クロームボックスの鼻祖・弾慎平君」という記事もあるから、その頃台頭したクローム鞣しの先駆者であったことは間違いない。

昭和6年(1931)日本皮革時報社の『創刊三十周年記念号』での祝賀協賛広告では、同業大手の日本皮革や、山陽皮革などに伍し、全面広告で応じているから豪気である。軍の要請もあったのか、昭和6年のこの時点で、国策に沿って大陸進出まで果しているから驚く。「中華民國 上海 曹家渡 中華皮革廠 弾慎平」(写真参照)と誇らし気な大書がある。

この記念号には、業界の開祖西村勝三と弾直樹両名の事績も併記されている。その弾家事績の冒頭に、以下のような文章が付されている。「前略…七百余年連綿たりし豪族も、盛者必衰の運命に傾くまで後昆に伝うべき事柄が少なくないが、あいにく当主

が支那方面に居られるので、秘蔵の文献に接する事が出来なかった。ただ小部分の材料により明治以来を主とする左の消息を伝え得るのみ。他日完全なる古文献を紹介し得る機会あるを信じます。」と結んでいる。

文中「あいにく当主が支那方面に居られるので」というのは、まさしく弾慎平その人を指していることが分かるし、昭和6年時点で、「秘蔵の資料」があることも推定できるので、先ずうれしい状況である。

木下川地区の大手メーカー東京皮革製造所が、戦中戦後をどう生き抜いたか、その後の情報はまったく伝えられていない。

出来得れば、昭和6年にタイムスリップしたいものである。

